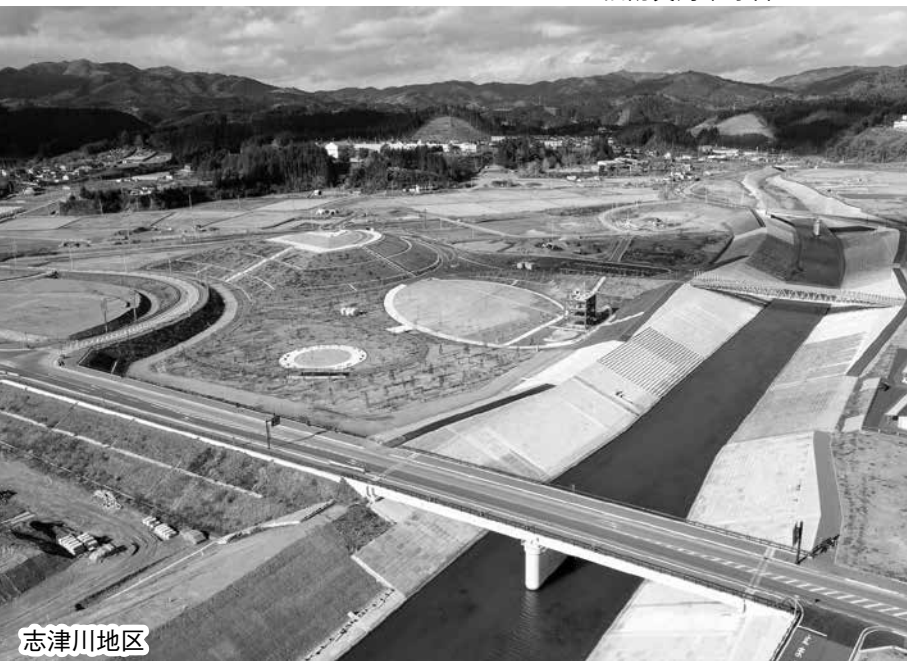


大震災 から10年

大口町は、東日本大震災発生後の平成24年4月から、大口町の人口約2万人と規模がほぼ同じ南三陸町へ毎年職員を1名派遣しています。今回の特集では、



▲旧防災対策庁舎



東日本大震災から10年

2011年3月11日に発生した東日本大震災から、今年で10年を迎えます。

大きな揺れだけではなく、岩手・宮城・福島県を中心とした太平洋沿岸部を未曾有の大津波が襲い、壊滅的な被害を及ぼしました。

大口町では、東日本大震災のあった翌年、平成24年に総務省の要請により行政機能のサポートや復興支援

のため職員が被災地に派遣され、翌25年からは町独自の判断で宮城県南三陸町に職員を派遣する支援を継続してきました。

平成31年4月から「被災地の力になりたい」と2年間、派遣職員として着任している鈴木里恵さんに、現地での体験談を伺いました。

鈴木さんの南三陸町での仕事内容を教えてください。

「歴代の派遣職員と同じく、南三陸町教育委員会教育総務課で仕事をし

ています。

就学援助事業や転入学や新入学生の就学関係、児童生徒や教職員の健康診断等の学校保健関係、特別支援教育関係等を担っています。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、小中学校へのサーモグラフィーカメラ導入やマスク等寄贈の受け入れ、衛生管理面のサポートもおこないました。

今年度はコロナ感染症で大変でしたね。南三陸町のまちな様子はどうですか。

「学校行事では2校ある中学校の内1校が修学旅行の行き先を県内に変更したり、もう1校は中止になりました。遠足を中止する学校もあり、影響はとても大きかったです。部活動の制限、夏休みや冬休みの短縮等、震災とは違う前代未聞の対応に四苦八苦でした。

学校や病院等ではサーモグラフィーカメラの設置や、普段の業務で使用している机や窓口、会議等で使った部屋の消毒作業をしたりと、普段以上の業務を求められています。

幸い、南三陸町では新型コロナウイルスの感染者は出ていません。ただ、やはり福興市等のイベントやお祭り等の中止が相次ぎ、とても静かな一年でした。いつもなら、今年度同じく派遣されてきた職員の皆さんとお祭りに行ったり、「ご飯を食べに行ったりもしていたのですが、それも思うようにできないため、寂しい思いをした方も多かったようです。

秋頃から、少しずつイベントの開催も増え、年の瀬には昨年2月から延期が続いていた福興市が、感染症対策をおこないながら「志津川湾おすばでまつり福興市」の開催が叶いました。「おすばで」とは三陸沿岸地域の方言で「酒のつまみ」だそう

東日本 発生か

平成31年4月より、派遣職員として南三陸町役場に勤務している鈴木里恵さんに、10年たった現在の復興の様子を伺いました。



▲中橋



▲南三陸ワイナリー



復興祈念公園



▲祈りの丘・名簿安置の碑



歌津地区

です)入口の検温やテイクアウトのみの販売に限定し、大変にぎわっていました。1月には第99回福興市も開催し、第100回に向けて同様の対策をとりながら準備を進めているようです。

※福興市 町内の商店主らが、東日本大震災後の2011年4月に始めた物産販売イベント。ほぼ毎月開催されています。

現在の南三陸町の復興の様子を教えてください。

―南三陸さんさん商店街と復興祈念公園を結ぶ中橋が開通しました。建

築家の隈研吾さんが設計し、復興を象徴する一つとなっています。復興祈念公園も10月に全面開園し、旧防災対策庁舎を近づいて見ることができま

南三陸さんさん商店街は、派遣された職員にお薦めのグルメをお聞きすると必ずお話をされる商店街ですね。「サンサンと輝く太陽のように、笑顔とパワーに満ちた南三陸の商店街にしたい」というコンセプトのもとオープンしました。

―賑わいの場としては「南三陸ワイナリー」がオープンしました。ワインはもちろん100%南三陸町産リノゴで作ったシードルを販売しています。ワインは現在熟成中ですが、同じく100%南三陸町産のブドウで造ったものが今後発売予定で、南三陸町の新たな特産品になるのではないかと思います。熟成の仕方が独特で、南三陸町の海の中に沈めて作っているそうです。現在販売しているものを購入して試してみました

が、どちらも後味がすっきりとしていて美味しかったです。オンラインショップではワインに合う魚介のおつまみとセットになった商品も売られています。ぜひ手に取って試してほしいです。

被災地で2年間生活してみて、鈴木さん自身の防災意識は変わりましたか？災害への備え、または被災した後の生活で大切だと思ったことは何ですか？

―やはり日頃の備えです。これは昨年度から変わっていないですね。

食料や水等の確保はもちろん、昨年度は暖冬であり意識しませんでした。今年度は地元の方でも珍しいといわれるほど寒く、被災したら暖房のないところで過ごすこともあると思うと、最高気温が氷点下になることがあるので防寒対策も十分にしておかないといけないと思いました。

これについては地震だけではなく、全国各地の大寒波による大雪や道路での立ち往生への対策につながります。食料や飲物、毛布やバッテリーを車に積んでおくのも必要だと思います。

コロナ禍の防災対策も大きく変わっただと思います。大口町でも職員が避難所の感染対策を学ぶ研修があり取材をしました。南三陸町のコロナ禍

の防災対策を教えてください。

ーコロナ禍での防災対策は次の取組を実施しています。基本的には、国・県の指針等に照らした対応となっております。

▽新型コロナウイルス感染症対策に対応した避難所運営マニュアルの作成

▽避難所における新型コロナウイルスウィルス等の感染症対策

※住民への周知（チラシ等の配布）、避難所用感染症対策用品の購入（テント、パーティション等）

▽指定緊急避難場所の運営を担う自主防災組織への感染対策用品の配布（予定）

※非接触式電子体温計、その他感染防止用品（消耗品）

▽要配慮者向けの感染防止用品の購入（避難所用）

※口腔ケア用品、女性用デリケート用品（避難所用）

▽新型コロナウイルス感染症対策に対応した避難所開設・運営訓練（手順等の確認）

※避難者の受付、検温、パーティションやテントの設置等

取材にて

南三陸町は震災時、防災庁舎で最後まで町民に避難を呼びかけ、津波の犠牲となった女性職員、また、防災庁舎の屋上で無線アンテナにしがみついた助かった職員の方々の報道が繰り返し流され、町名が国民の胸に刻まれたまちです。震災直後から、復興事業に向け全国の自治体から約100名余りの職員が派遣され復興計画が始動しました。

広報おおくちでは、平成25年から南三陸町へ復興支援で派遣される町職員から、復興の様子をリポートしていただき、毎年特集で発信してきました。

職員から送られてきたリポートや特集を読み返すと、初期の派遣では甚大な被害の様子を目の当たりにしたとき、いろいろな思いが湧きあがり、自然と涙があふれたという想いや、M7クラスの地震を経験した職員は、家族・仲間・ご近所の存在の大きさを改めて実感。仕事をすることも、日常生活を送る上でも、身をもって実感したとあります。

現地から送られてくる写真を比べてみると、復興が進んだ様子が伺えます。復興間もない町の写真には、町内の道を造るため大型タンプカーやショベルカーが何十台も写っていました。数年後、その土地はかさ上げされ、大きな道路が開通していました。震災から10年という歳月がながれ、南三陸町は確実に復興から発展へと向かっています。

職員の皆さんが現地で肌で感じながら学んだ貴重な経験を、大口町の災害対策に活かし、コロナ禍の防災対策も含め、災害に強いまちづくりにつながっていかねばと思います。

大口町から南三陸町への職員派遣は令和3年3月で終了します。



▲新庁舎外観（平成30年）



▲仮設庁舎外観



▲新南三陸さんさん商店街（平成29年）



▲仮設南三陸さんさん商店街



▲南三陸を代表するブランドグルメ キラキラ井

南三陸町のお土産が
購入できるオンラインショップ



山内鮮魚店



千葉のり
ONLINE 店



南三陸 de
お買い物